

## 4. 共同研究経過報告

### 〈人格の成熟〉に関する哲学的並びに心理学的研究

山口 泰司 阿部 慈園

A Philosophical and Psychological Study on  
the Development of Personality

Yasuji YAMAGUCHI Jion ABE

本研究は、〈人格の成熟〉という一つの包括的な理想概念の実態に、宗教哲学と精神病理学という二つの筋道から迫ろうとするものである。成熟という概念は、未熟という概念の対概念として、発達の不全・停止・歪み・逸脱などの否定的概念と本質的な関わりをもち、その限りで、否定性の克服の営みとしての〈癒し〉の概念と不可分の関係をもっている。

ところで、この世で〈人格の成熟〉を全うしようとするならば、何よりもまず〈現実への適応〉と、より本質的な営みとしての〈自己への適応〉とが不可欠になる。だとすれば、〈人格の成熟〉についての研究には、〈現実への適応不全〉から生ずる人格の歪みとその精神病理学的癒しについての研究に加え、〈自己への適応不全〉から生ずる人格の歪みとその宗教哲学的癒しについての研究が、不可欠となるだろう。

とりあえず本年度は、上記の研究の第一歩として、人格の成熟への精神病理学的アプローチを優先させることにして、Otto F. Kernberg (“Borderline Conditions and Pathological Narcissism”, “Internal World and External Reality”, “Severe Personality Disorders”), Edith Jacobson (“Psychotic Conflict and Reality”), Heinz Kohut (“The Analysis of the Self”), Erich Neumann (“Das Kind — Struktur und Dynamik der werdenden Persönlichkeit”), Erich Fromm (“The Art of Being”)などの著作の研究と紹介を行った。以下紙数の関係で、Kernbergの著作の概要のみを簡略に記して、研究経過報告とする。

O. F. Kernberg『内的世界と外的現実（下）——対象関係論の応用』（山口泰司監訳、文化書房博文社）

本書は、原著の第一部『内的世界と外的現実（上）——対象関係論の検討』に引き続いて、残りの部分を全訳したものである。

上巻が Klein, Fairbairn, Jacobson, Mahler らの対象関係論の歴史を Kernberg 自身の立場から通覧した比較対象関係論の試みであるのに対して、下巻は、上巻で示された Kernberg の自我心理学的対象関係論を、さらに正常な個人・カップル・集団と病的な個人・カップル・集団の力動心理学的解明に應用して、対象関係論に基づく新しい社会心理学的基盤の構築を目指したものである。

本書に収録された第二部「病理学と治療への応用」では、まず始めに中年期の発達課題に焦点を当てて、正常なナルシズムと病的ナルシズムの心理がそれぞれ対象関係論の視点から綿密・周到に論じられたのちに、病的ナルシズムや境界パーソナリティー機構をかかえた患者の治療を鍵とした精神分析の技法と精神分析的精神療法の技法の異同の検討を通じて、精神分析的精神療法における対象関係論の目覚ましい可能性が、臨床例を踏まえながらきわめて説得的に論じられている。それにしても、対象関係論にもとづく病的ナルシズムの記述には、鬼気迫るものがある。

第三部「集団における個人」では、群集集団の心理についての Freud の理論、小集団の心理についての Bion の理論、大集団の心理についての Rice や Tourquet らの理論などに基づきながら、さらに Kernberg 自身の観察から成る中規模未組織集団の心理についての独自の研究を通じて、集団心理の解明における対象関係論的視点のきわめて大きな可能性が、やはり臨床例を踏まえながら、これまた綿密・周到に論じられている。ここでは、集団と組織の退行、集団と個人の相互作用、集団とリーダーシップの関係、さらには集団における志気などの問題が、病的ナルシズムや境界パーソナリティー機構を規定している個人の対象関係の病理をベースに論じられており、その意味で第三部は、実質的には、対象関係論的集団精神病理学の試みとなっている。

第四部「恋愛・カップル・集団」では、新しくカップルに焦点が当てられる。Kernberg は、カップルを一つの独自な統一体と見なし、それが広く人間的環境一般との間でどんな相互作用を営んでいるかを記述している。Kernberg は、ここでもまた、対象関係の成熟に立脚した

精神・性的人格発達論の包括的な試みを、男女それぞれの心理に即してきわめて周到に行ったあと、青年期の恋愛や中年期の恋愛が集団との相互作用を通じてどんな試練にさらされ、どんな病理に傾いていくかを、「ロメオとジュリエット」やその他の症例に見られる未熟な恋愛や精神病理学的恋愛の症例などを通して、興味深く論じている。

ここで Kernberg は、自らの内的対象関係論としての鍵概念として、性的情熱と境界突破という二つの概念を自在に駆使しながら、恋愛関係の成熟にとって攻撃心の洗練と成熟がいかに重要であるかを、きわめて説得的に説いている。その意味で第四部は、Freud の二重本能論と Kernberg 自身の内的対象関係論とに立脚した精神分析学的性愛論の定式化の試みともなっていれば、対象関係論の精神分析学に立脚した精神病理学的恋愛論の定式化の試みともなっている。それにしても、早期対象関係の歪みが恋愛関係にもたらす影響の大きさや、集団心理が恋愛関係にもたらす影響の大きさには、あらためて目を見張る思いがするであろう。

O. F. Kernberg "Severe Personality Disorders", 1984, Yale Univ. Press

本書は、同時に二つの事柄を目指している。第一の狙いは、ボーダーラインの病理と自己愛の病理のうち特に重症ケースの診断面と治療面を強調することによって、著者の以前の著作に含まれていた知見と定式を拡張しようとする点にある。第二の狙いは、臨床精神病理学と精神分析学の分野からこれらの問題に関する他の人たちの最近の展開を探って、それらを、著者自身の現在の考えに照らして通覧しようとする点にある。本書に一貫して見られる著者の主たる関心の一つは、著者の理論的定式を臨牀的に当を得たものにして、とりわけ難治ケースの診断技法と治療技法の道具を、臨床家に提供したいという願いにある。

そのために著者はまず、微分的診断法という一つの特異的診断様式と、構造的診断面接と著者自身の名付けるものの実施技法について説明して、それによって一つのきわめて難しい分野に見られる混乱を減少させようとしている。また同時に著者は、そうした技法と、予後の規範と、それぞれのケースに最適の治療タイプという相異なる三つの要素を一つに結びリンクをも、完成させている。

次いで著者は、とりわけこの上もなく重症なケースに注目することで、ボーダーライン患者のための治療的戦略について詳述している。本書でもこの問題を扱った節

には、同じ精神分析学の枠組みからひとしく生まれた表出的精神療法と支持的な精神療法についての系統的検討が、納められている。

自己愛病理の治療に関するいくつかの章では、重症の慢性の性格抵抗を扱うのに有効な技法の展開に、焦点を当てている。

いま一つの厄介な治療分野に、非反応的患者や難治患者の扱いがある。つまり、治療の膠着状態にはどう対処したらよいのか、一貫して自殺の恐れのある患者にはどのように対したらよいのか、一概に反社会的患者と言っても、治療可能な患者と治療不能の患者はどのように区別したらよいのか、転移の場面で妄想症の退行を来している精神病ストレスの患者には、どのように対応したらよいのか、といった問題がそれである。こうした問題は、第四部で扱われている問題の一部を成している。

最後に著者は、長期入院の必要な患者の治療の、以前に提出した治療コミュニティ・モデルに基づきながらもそれとは若干異なった入院治療のモデルを、提出している。

したがって本書は、その大部分が臨牀的である。著者の狙いは、精神療法家と精神分析家に、精神療法の特異的技法という広範な医療物資を準備することにある。同時に著者は、関連のある臨床データから逸脱しない範囲で、重症の超自我病理についての新しい仮説を通じて、自我脆弱性と同一性拡散の病理に関する著者自身の以前の業績にも推敲を加えている。そのようなわけで、本書には、自我心理学的対象関係論の最新の展開が収められていることになる。

付記

Edith Jacobson の『精神病的葛藤と現実』については、『明大教養論集1993年度』所収の論文「Edith Jacobson 研究その1」(山口泰司)を参照されたい。